


blueprism®

 **sojitz**
New way, New value

エンタープライズ向けインテリジェント オートメーション活用事例：

「単純作業を自動化し、
より創造的な業務へシフト」という
コンセプトを Blue Prism で実現し、
年間約 20,000 時間を創出

 **sojitz**



双日株式会社は、国内外の約 400 社の連結対象会社とともに世界の様々な国と地域に自動車やプラント、エネルギー、金属資源、化学品、食料資源などの事業を展開する総合商社として幅広いビジネスを展開しています。開国から戦後復興と高度成長という 150 年の歴史を通して近代日本の礎を築いてきた複数の商社を源流とする同社は、新しい時代の節目を迎えるにあたって、生産性向上のために社内の業務効率化やペーパーレス化を推進してきました。その一環として導入された Blue Prism のインテリジェント オートメーションは、同社の "DX" (デジタル トランスフォーメーション) を推進するための基盤として大きな期待を集めています。

導入の背景： 大手総合商社が抱える両刃の剣

世界を舞台にビジネスを展開する双日株式会社は、2020 年 10 月現在、9 つの事業本部で構成されます。各本部が独自の事業を展開することで広範な事業展開が可能になるという大きなメリットがある一方で、事業本部ごとに扱う商品が異なり、商習慣や取引内容、そして書類や様式が異なるという大手総合商社であるが故の課題が存在していました。この縦割りの事業区分を分解して横方向の遠心力に転換することによって新しい業務形態にシフトすることは急務の課題でした。しかし、新しいテクノロジーが次々と生まれ、DX に関連する状況が絶えず変化しています。社員の意識調査では DX や働き方改革の具体的な理解が浸透しているとは言い難い状態が判明しました。

「当社は、事業本部ごとに 10% ずつの成長を目標として掲げているのですが、その目標を実現するには会議時間の短縮や残業の削減といったレベルではなく、DX を推進して現行の各種業務を抜本的に効率化し、新しいことにチャレンジするための時間を創出することが不可避でした。DX の足掛かりとなる自動化を実現するために新しいテクノロジーのキャッチアップが必要でしたが、双日には、そのナレッジがありませんでした」^{かさい}河西 敏章氏 (執行役員 人事、総務・IT 業務担当本部長)

そのような状態の双日で必要とされていたのは、個々のプロセスの自動化ではなく、一定のレベルで一元的かつ包括的に制御しながら推進することのできる自動化でした。そして、現場で機能する自動化を実現するには単なる自動化テクノロジーだけでなく、業務の棚卸的な見直しによる考え方と行動様式の変革も必要でした。

導入の経緯： 自動化に向けた働き方の見直しと 現実的なツールの選定

双日では、2017 年 3 月に社内有志による RPA の勉強会がスタートしました。当初、「RPA とは何か」のレベルから手探り状態で始まった勉強会でしたが、半

双日株式会社
執行役員 人事、
総務・IT 業務担当
本部長

河西 敏章 氏



双日株式会社
総務・IT 業務部、部長

並 真樹也 氏



双日株式会社
総務・IT 業務部
RPA チーム
チームリーダー

石井 俊樹 氏



年後にはデスクトップ型 RPA による業務の自動化を実現して社内説明会が実施され、ロボットによる PC 操作の自動化という RPA のコンセプトは社内でも驚きと共に非常に良い反応を得ました。同時に、どんなに良い業務効率化ツールであっても、個人が作成・運用する形にしてしまえば、結局は属人化を助長してしまうという意見もあり、中央である程度コントロールしながら自動化していくための方法論やツールとしての機能も必要だと気づかされました。

デスクトップ型 RPA では、最初のステップとして一定の成果を確認することができましたが、個々の PC を管理する必要があるという点に加えて、9 つの事業本部ごとに商流が異なる双日において全社的にスケールアウトする際のコスト、そして自動化プロジェクトの無秩序な開発と実行の可能性が懸念材料として浮上してきました。その結果、統合管理 RPA へのシフトが検討され、さまざまな RPA 製品が候補として挙げられましたが、双日で最終的に選定されたのは、堅牢な製品設計思想に基づくオブジェクト型アーキテクチャを採用した Blue Prism でした。作成した自動化用の部品はオブジェクトとして再利用可能な資産として活用することができる点に加え、高度なセキュリティと認証機能、監査ログが随時確認できる証跡管理、そして全社レベルに加えグループ単位での運用が可能な点も大きな評価ポイントでした。「自動化プロセスを部品化できるので、自動化を進めれば進めるほど効率化が進むのは大きなメリットに思えました。また、認証情報とキューがデータベースに暗号化されるのでセキュリティの面でも非常に優れていると判断しました」石井 俊樹 氏（総務・IT 業務部 RPA チーム チームリーダー）

多様な商材を扱う双日には多くの異種システムが存在しますが、Blue Prism では、それらのシステムとの整合性もクリアされました。「各種業務では、基幹システムに情報を入力する際にデータを準備する前工程に手動での多くの作業が必要でした。Excel のマクロ等は社内でも利用されていますが、マクロではカバーできる範囲に限られ、特に社内アプリケーションを跨ぐような操作は手作業に頼らざるを得ませんでした。双日が必要としていたのは、前工程を自動化すると同時に最終的なシステムへのデータ入力までのラストワンマイルを埋めるツール、それも要望のあった部署だけでなく、従来のやり方を変えることに消極的な部署にも浸透させることのできるツールでした。」並 真樹也 氏（総務・IT 業務部、部長）

導入の効果:

双日では、Blue Prism の導入から約 3 週間で最初の自動化プロセスが稼働を開始しました。この自動化のメリットは、契

約管理と入金処理という 2 つの業務で顕著に「体感」されました。自動化によって作業時間が最大 70% 削減されたという契約管理業務では、Blue Prism の導入前は (1) 担当者が取引先の Web ポータルから契約書類をダウンロードし、(2) 記載されている内容を Excel 形式の管理台帳に転記し、最後に (3) 転記された内容を別の担当者が確認し、基幹システムにデータを入力するというプロセスがすべて手動で行われていました。1 日平均 60 ファイル (異なる形式の 2 つのファイルに格納された 30 件のデータ) を手作業で転記および確認する業務を自動化するにあたっての最大の要件は、一連の処理を標準化すると同時に、商材のブランドごとに微妙に異なる処理を細かいレベルで特定することでした。「自動化の要件定義の一環として手順書を作成し、属人化されていたプロセスを明文化しました。その際に複数のブランドで処理が類似する部分と異なる部分を洗い出しました。処理の標準化を進めると同時に、処理が異なるために標準化できない部分を可能な限り細かく拾い上げて、自動化した後にエラーが生じて再作業が発生するような可能性を排除するよう努めました。また、差異のある処理については、標準化の可能性という観点から現場に業務の見直しを促す提案を積極的に行いました」(石井 氏)

同じく多くの処理が手動で行われていた入金処理業務では、すべての営業部での展開が期待されています。Blue Prism の導入前は、担当者が毎日システムにログインして取引先からの入金の有無を確認する必要がありました。入金を確認できた場合、対象となる債権と照合して消込作業を行う必要があります。複雑な処理ではありませんが、入金が多く発生する月初と月末の数日間は、担当者の多くの時間と労力が消込作業に費やされていました。現在、この一連の手順を標準化することによって、すべての営業部で自動化プロセスによる消込処理を行うことが可能になりました。また、入金が確認された際は自動的に通知が送信されるので、担当者はシステムにログインして情報を確認する必要もなくなりました。

「現場には自動化プロセスそのものを見せないような運用としているので、稼働開始からエラー処理、そして終了までの一連のプロセスを無人のランタイム リソースが自律的に処理できる点が私たちにとって大きなメリットです。仮に処理の途中でエラーが発生しても自動化プロセスが動作する前の状態まで戻すことができます。また、監査ログを確認して証跡を取ることのできることで安心です」(石井 氏)

それでも展開をスムーズに行うためには石井氏を始めとする担当チームの一方ならぬ努力が必要でした。プロセスの平準化は、従来のやり方を改めることを意味します。現場の協力を

得るために、担当チームは定期的な説明会の開催や現場からのフィードバックの収集、RPA 活用に関わるルールや仕組みの整備などを通してきめ細かいフォローアップを提供しています。

将来の展望:

パンデミックによって鍛えられた「しなやかさ」

双日の自動化プロジェクトは順調に推移し、2020 年 3 月時点で約 80 の業務 (150 プロセス) が自動化されました。一方で、もっと活用できる Blue Prism の高度な管理機能が多く存在しています。Blue Prism の管理機能の有効的な活用は今後の課題の 1 つとしてリストされていますが、言い換えれば、今後の双日における自動化には、それだけ大きな可能性があると言えます。

Blue Prism の導入が進むにつれて、本格的な自動化をさらに推進するには、双日の事業全体のビジョンを視野に入れる必要があることも明らかになりました。双日の源流からの歴史は優に 150 年を数えますが、ニチメン株式会社と日商岩井株式会社との合併により 2004 年に誕生した双日は、いまだ設立から 20 年に満たない "ティーンエイジャー" の会社です。双日は若い会社なので大きな可能性があると同時に、従来の働き方を超えた各種取り組みにより、今後も新たな価値提供を行っていくことに強くコミットしている会社です。Blue Prism 導入前の双日に見られた DX やデジタル ディスラプション (テクノロジーによる破壊的イノベーション) などのイノベーションに対する消極的とも見えた姿勢は、多くの社員が Blue Prism 導入の成果を体感したことによって大きく変わりました。今日の双日では、業務フローを根本的に見直すと同時に、データを起点としたビジネスを確立するための様々

な取り組みが始まっています。例えば、社内の IT リテラシーの底上げを目的として、社員の取得推奨資格のリストに IT パスポートが追加されました。このように今はまだ小さなスタートですが、「RPA とは何か」のレベルからスタートした勉強会と同様に、いくつものスモールサクセスが徐々に成長して大きな化学反応が生まれるような形での効果が期待されています。自動化のプロセスを実際に作成することが社内全体の DX 推進に向けた IT リテラシーの向上につながり、業務上の実益も生まれました。また、Blue Prism の導入に端を発した業務改革は、社内全体での各人の業務の見直しのレベルにまで落とし込まれました。作成した自動化のプロセスを社内で横展開する際に部門間や部署間での業務プロセスの差異が視覚化され、普遍的な部分を洗い出すことができました。異なるプロセスの標準化や共通プロセスの自動化によって多くの業務で省力化が実現された結果、双日では、年間で 2 万時間もの時間が "創出" されると同時に、高度にしなやかな会社の機動力を確認することができました。

「多くの企業と同様に、私たちは今回のパンデミックで従来の働き方を抜本的に見直す必要性に駆られました。私たちは社員の健康と安全を第一に、今できることを考え、柔軟な働き方を模索しました。時期を同じくして Blue Prism の活用が進んでいたことが幸いし、会社として困難な状況に柔軟に対応できる機動力を確保することができました。多くの業務プロセスが省力化される一方で、社員の IT リテラシー向上によってさらに新しい価値が生まれるというポジティブなスパイラルが生まれ、DX 経営における人材戦略として所謂インテリジェントオートメーションの取組みが有効的であることがわかりました。この双日の "しなやかさ" は、各社員の意識を確実に変えています。今は小さな変化かもしれませんが、3 ~ 4 年後には大きな変化として実を結ぶものと確信しています」(河西氏)

Blue Prism について

Blue Prism 社は、エンタープライズ向けインテリジェントオートメーションにおけるグローバルリーダーです。Blue Prism は、150 を超える地域で、フォーチュン 500 に名を連ねる企業や公的機関を始めとする 1,800 を超える企業や組織に採用されています。Blue Prism が提唱する新しい仕事の進め方は、効率性を高め、何百万もの業務時間の高付加価値業務への再投資を可能にします。Blue Prism のデジタルワーカーは、インテリジェントで堅牢なセキュリティと高度な拡張性を有しており、働き方の変革を推進します。詳細は、www.blueprism.com/japan をご覧ください。

お問い合わせ先: jpinfo@blueprism.com

blueprism®